

The idea of Indian Architecture of the members  
of the Asiatic Society in the latter part of  
the eighteenth century

高松, 由子

<https://doi.org/10.15017/458541>

---

出版情報：九州芸術工科大学, 2002, 博士（工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

## 第4章 インディアン・リバイバルの建築作品 (メルチェット・パークのヒンドゥー教寺院)

### 4-1. 序 【図17】

本章では、ヘースティングズ (Warren Hastings, 1732-1818) のインド観と、彼のために建設された、英國ハンプシャー州 (Hampshire) にある「メルチェット・パークのヒンドゥー教寺院 (Hindoo Temple at Melchet Park)」(1800) とを分析しつつ、18世紀後期という時期に、インド建築が理想的な古代世界を体現するものとして解釈されていたことを指摘するものである。

これまで述べてきたように、18世紀後期における協会員たちは、初期の時代のインドに一種の理想的な世界があり、そこにおける建築が建築の原型ともつながっているという壮大な歴史観を描いていたものと考えられる。しかし、彼らのインド建築研究は、実証的には不充分なレベルにあったし、また彼らの論文では、建築にかんする言及はわずかであった。

こうした文脈において、協会のパトロンであり、「メルチェット・パークのヒンドゥー教寺院」を献呈された、ヘースティングズの例は重要である。なぜなら、インド建築研究にたいする協会員たちの姿勢がディレクタント的であったとはいえ、この建築作品は、彼らのインド建築観の一部を具現化させた建築例と考えられるからである。

また序でも述べたように、これまでの日本において、ファーガソンによる『インドと東洋の建築の歴史<sup>1)</sup>』(1876) は、近代のインド建築史研究の基点となっている。彼以前の英國人によるインド建築研究やインド建築観をテーマとした論考は、あまり知られていない。「メルチェット・パークのヒンドゥー教寺院」は、英國人によるインド風建築の一実例として紹介されるにとどめている<sup>2)</sup>。現在、インドを研究する歴史学者や社会学者によって、サイード (Edward W. Said, 1935-) のオリエンタリズム論を批判する立場からも、ヘースティングズ行政と協会におけるインド研究との関係が再考されている<sup>3)</sup>。

それゆえ、彼らのインド建築研究が、のちのインド建築史の分野で、どのように注目されていたのかを知ることは必要であろう。

1) James Fergusson, *History of Indian and Eastern Architecture*, vol. I-IV, London, 1876

2) Patrick Conner, *Oriental Architecture in the West*, London, 1979, pp. 117-119

Raymond Head, *The Indian Style*, London, 1986, pp. 13-15

3) ヘースティングズの経歴や業績については、以下の文献に説明されている。

Brian Gardner, *The East India Company*, London, 1971 Penderel Moon, *Warren Hastings and British India*, London, 1947 Keith Feiling, *Warren Hastings*, London, 1954

また現在、カースト研究において、ヘースティングズ行政と協会によるインド研究との関係が再考されている（藤井毅「歴史のなかのカースト」「現代思想」青土社、1994年6月号、99-111頁）。サイードのオリエンタリズム論を批判する立場からも、ヘースティングズ行政と協会によるインド研究との関係が再考されている (N. G. Casseles(ed.), *Orientalism, Evangelicalism and the Military Cantonment in early Nineteenth-Century India*, Edwin Mellen Press, 1991, pp. 360-361)。

また序（問題2）でも述べたように、ファーガソンは著書において、インド建築の諸形態を、当初から批判されていたとはいえ、インドの人種にかんする彼独自の分類方法によって大別している<sup>4)</sup>。ここでは、さまざまなインド建築の諸形態が体系化されており、その意味で、包括的であり相対主義的であるともいえる<sup>5)</sup>。

これとは逆に、18世紀後半から19世紀初頭において、古代の侵入者である「アーリア人」にも関連づけられた、古代インド建築のみが理想化された。

その背景には、聖書にある「人類單一起源論」という考え方をもとに、「ヤベテ語」という言語観や「アーリア理論」という、ヨーロッパ民族の系譜理論が登場したという経緯がある。このとき、サンスクリット古典籍とその文学の発見が決定的な意味をもった。インドとヨーロッパとは太古において同根であり、古代インドは回帰すべき理想的な世界であるといった発想を提供した<sup>6)</sup>。

それゆえ、この回帰すべき理想的な古代世界を体現するという文脈において、「インディアン・リバイバル」は、いわゆる「グリーク・リバイバル」と類似した意味で解釈することもできるであろう。

#### 4-2. ヘースティングズのインド統治

インド亜大陸における英国の領土支配は、事実上、プラッシーの戦いの勝利（1757）を契機に開始された。クライブ（Robert Clive, 1725-74）は、ムガール皇帝からベンガル、ビハール、オリッサの地税徴収権を譲渡（1765）させ、二重統治を施行した。東インド会社の社員は、無法行為によって短期間に巨富を蓄積し、帰国した。その結果、ベンガル経済は混乱し、会社自体も破産状態に陥った。英國政府は、この事態を放置できず、最終的に「ノース規制法<sup>7)</sup>」（1773）を制定した。この法によって、会社社員の綱紀肅正をはかり、統治機構として総督・参事会・高等法院を設置した。そして1774年、初代ベンガル総督としてヘースティングズ（1785年まで在任）を任命した<sup>8)</sup>。

1750年、ヘースティングズは、すでに、東インド会社の書記官としてカルカッタに赴任（1764年まで在任）していた。そのちマドラス参事会員（在任1769-72）、ベンガル知事（在任1772-74）、初代ベンガル総督（在任1774-85）を歴任し、英領インドの基盤を築いた。そして総督引退ののち、英國に帰国した（1785）。しかし、英國議会で弾劾（1788-95）された<sup>9)</sup>。

彼はベンガル知事（在任1772-74）の時代から、インド研究を活かした「ヘースティングズのインド法<sup>10)</sup>」（1772）を制定していた。「ヒンドゥーの相続、婚姻、カースト、そ

4) Thomas R. Metcalf, *An Imperial Vision*, University of California Press, 1989, pp. 30-31

5) 井上充夫「建築美論の歩み」鹿島出版会, 1996年, 176頁

6) L・ボリヤコフ「アーリア神話」アーリア主義研究会訳、法政大学出版会, 1985年, 並頁

7) "North's Regulating Act", 1773

8) P. Moon, op. cit., pp. 85-116

9) P. Moon, op. cit., pp. 18-21

10) "Hastings' Indian Bill", dated 15th Augus, 1772

の他の宗教慣行と制度にかんする争いはヒンドゥーの法をもって、ムスリムのそれにはムスリムの法をもって、おのおの裁定する<sup>注11</sup>」という決定である。

その目的は、クライヴの二重統治を終焉させること、インド大守にかわって英国人が眞の主権者となること、英国人統治者によって古代に確立されたインドの法、諸制度、慣習を復活させることにあった<sup>注12</sup>。

#### 4-3. ヘースティングズのインド文化政策

帰国（1785）したヘースティングズは、ヘースティングズ侯爵（the Marquis of Hastings, 1754-1826, 第6代ベンガル総督, 在任1814-23）にあてた手紙<sup>注13</sup>（1812）において、インドを回想し、自らが奨励したサンスクリット古典籍の解説を中心とするインド研究の目的を、以下のように記した。

英國本国に、インドはヨーロッパに劣らない古代文明を有する、という真相を伝えること。

そして、インド人は自らの整然たる法を保持しないがゆえに英國の精神的啓蒙を必要とする、という一般的見解を修正することにあった<sup>注14</sup>。

第2章（2-2-2）で述べたように、1770年代、インド行政に属人法の原理を導入するにあたって、実用にかなったサンスクリット法典といえばそのペルシア語訳しか存在せず、しかも原典に当たることができるほどサンスクリットに通じたヨーロッパ人は一人もいなかつた<sup>注15</sup>。それゆえヘースティングズは、東インド会社の社員にたいして、サンスクリット古典籍の解説を奨励し、インドのさまざまな領域にわたる研究を積極的に支援した<sup>注16</sup>。

彼自身、ウェストミンスター校<sup>注17</sup>在学中（1743-50）に学んだ古典文学と哲学の教養だけでなく、アラビア語、ベンガル語、ペルシア語が堪能であった<sup>注18</sup>。さらに会社の書記官の時代から、ヒンドゥー哲学に深く傾倒し、ベナレスの梵学者を訪問した（1756）。英国人文学者ジョンソン博士（Dr. Samuel Johnson, 1709-84）との会見（1769）において、自らのインド研究の対象がサンスクリット、歴史、慣習、古代遺跡にあることを、博士に印象づけた<sup>注19</sup>。

そして総督引退の直前の1784年、協会の設立を支援した<sup>注20</sup>。協会は、彼がカルカッタ赴任当初から行っていたインド学奨励を、いわば制度化したものである。また、彼の帰国

11) 本研究の第2章（2-2-2. 協会の設立の経緯）において掲載した。

12) 宮原辰夫「イギリス支配とインド・ムスリム」成文堂, 1998年, 77頁

13) 本稿は、この書簡をP. Moon, op. cit., pp. 328-354にある表題「chapter XVIII—Hastings's character and opinions note on books」から引用した。

14) P. Moon, op. cit., pp. 349-350

15) E・W・サイード「オリエンタリズム」板垣雄三と杉田英明監修, 今沢紀子訳, 平凡社, 1994年, 79頁

16) P. Moon, op. cit., pp. 349-351

17) 当時のウェストミンスター校は、古典教育による啓蒙主義的な教育方針をもち、優秀な学生を東印度会社の社員として送り出していた（P. Moon, op. cit., pp. 8-10）。

18) P. Moon, op. cit., pp. 8-10

19) P. Moon, op. cit., pp. 350-351

20) P. Moon, op. cit., pp. 351-352

(1785) 以降も重要な成果を提供し続けた<sup>21)</sup>。

つまり、ヘースティングズによるインド研究の奨励とは、法の制定という政治的な必要性から生じていたとはいえ、そこには、古代のインド文化にたいする憧憬があった。

#### 4-4. ヘースティングズのインド観

##### 4-4-1. アーリア理論の思想的な背景

第1章で述べたように、18世紀後半のヨーロッパでは、「人類单一起源論」という考え方にもとづいて、モーゼの伝統以前の自然状態に回帰しようと、人類発祥の地を東方（創世紀にあるエデンの園の東）に見い出そうとする研究や著作が多かった<sup>22)</sup>。

ジョーンズは、前述の講演（1786）において、サンスクリットとギリシア語、ラテン語、古代ヨーロッパ諸語とが一つの源から分派したと発表した<sup>23)</sup>。彼の発言は、人類発祥の地を東方に求めようとする人々の願い通りのものであった<sup>24)</sup>。

「アーリア理論」という概念は、シュレーゲルの「インド人の言語と知恵<sup>25)</sup>」（1808）に始まる。彼は、ジョーンズの発言を根拠に、サンスクリットを最高で最古の言語と見なし、ヨーロッパ諸言語をその直接の子孫と見なした。最初の人類（アダム）と神の言語（ヘブライ語）という、創世紀のドグマを否定した。すなわち彼は、自らの人種の理想と合致するよう、言語の類縁関係を人種の類縁関係に置換させたのである<sup>26)</sup>。

##### 4-4-2. 反セム主義的な考え方

インド亜大陸とは、古代においてはギリシアとの交流があり、中世以降はトルコ系民族の支配下に絶えずムスリムが媒介するという、重層的な地域空間である。インド民衆は、土地の慣習法のもと、ヒンドゥーもムスリムも明確な区別のない世界で生きてきた<sup>27)</sup>。

ヘースティングズは、前述のヘースティングズ侯爵にあてた手紙において、インド亜大陸におけるムスリムとヒンドゥーにたいする自らの見解を、以下のように記している。

イスラム教義がもつ、異教徒を迫害する行為やその耐え難い精神は、3世紀にわたってヒンドゥーを支配し、束縛してきた。ヒンドゥーは甚だしい蛮行によって墮落したように象徴されているが、彼らは流血を嫌い、義務と法的服従に従順であった<sup>28)</sup>。

21) L・ボリヤコフ、前掲書、249頁

22) L・ボリヤコフ、前掲書、249頁、253頁　松村一男「<インディー>・ジョーンズ以前と以後」『現代思想』青土社、1994年6月号、116-117頁

23) Sir William Jones, "Discourse III. On the Hindus", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. I, no. XXV, 1788, pp. 418-421

24) L・ボリヤコフ、前掲書、249頁  
松村一男、前掲書、116-117頁

25) Friedrich von Schlegel, *Über die Sprache und Weisheit der Indier*, Heidelberg, 1808

26) 松村一男、前掲書、115-116頁

27) 荒松雄「ヒンドゥー教とイスラム教」岩波新書、1995年、169-170頁

28) P. Moon, op. cit., pp. 350-351

すなわち、従順なヒンドゥーは、脅威的なムスリムによって蹂躪され、墮落したというのである。

こうした考え方は、当時としてはむしろ一般的であった。18世紀中頃までのヨーロッパ人は、脅威的なイスラムにたいして憧憬としての古代インド、という図式化されたイメージを抱いていた<sup>29)</sup>。そして、クレイシー（L. H. Qureshi）が指摘しているように、18世紀末のインド駐在の英国人のあいだには、「やさしいヒンドゥーと、狂信的で恐ろしいサルマーン」という概念が形成されていた<sup>30)</sup>。

18世紀後半の英国人は、ヘースティングズも同じく、本来ヒンドゥー的なるインド社会にイスラム的異質分子が侵入したという見解をもっていた<sup>31)</sup>。

協会はインド研究の多くの分野で先端的な地位を占めたが、その学問とは、基本的に古代を対象にするもので、現実のインドには侮蔑的な眼差ししか向けなかつた。すなわち、古代のアーリア人社会が純粹なインド社会として尊重され、ムスリムに支配された中世はそこからの墮落であると考えられた<sup>32)</sup>。

つまり、ヘースティングズは、ムスリムを敵視する反セム主義的な考え方を抱きつつ、ムスリムに支配された中世インドは墮落であり、古代インドこそが理想化されるべきだと考えたのである。

#### 4-4-3. ヘースティングズ行政の背景としてのアーリア理論

こうした反セム主義的な考え方が、ムスリムとヒンドゥーとを分割統治する、ヘースティングズ行政の背景にあったと考えられる。

ところで18世紀をつうじて、「百科全書」にあるように、ヘブライ語を初源の言語とする説もあった。ヘブライ語はアラビア語とともにセム系言語である。ヨーロッパ人による世界諸言語に関する知識では、19世紀初頭まで「オリエント諸語」が「セム系諸語」と同義語であると考えられた。アラビア語とヘブライ語はともにセム系の言語である。そのため、反セム主義的な立場からも、古代ゲルマン人を人類の起源として位置づけようと、ゲルマン語をヘブライ語よりも古いとする決定的な証拠が求められていた<sup>33)</sup>。

また、18世紀後期の協会によるインド研究とは、サンスクリット古典籍のなかにヨーロッパ諸言語の祖語を見い出すという基本的な姿勢をもっていた<sup>34)</sup>。彼らの研究姿勢は、津田元一郎が指摘しているように、「インドにとって、ムスリムよりもヨーロッパ人がより親近的である、すなわち、ムガール王朝よりも英國の方がインド統治者としてより相応しい<sup>35)</sup>」という根拠を与えることにつながる。

29) E・W・サイード、前掲書、74-76頁

30) 荒松雄、前掲書、182頁

31) P. Moon, op. cit., pp. 349-351

32) 彌永信美「他者としてのインド」「現代思想」青土社、1994年6月号、173-179頁

33) 松村一男、前掲書、116-117頁

34) E・W・サイード、前掲書、76-79頁

35) 津田元一郎「アーリアンとは何か」人文書院、1990年、3-4頁

そして「ヘースティングズのインド法」の制定は、サンスクリット古典籍で語られた古代社会を現実のインド社会に蘇らせるとともに、ムスリムとヒンドゥーとのシンクレティズムの破壊を促し<sup>36</sup>、ムスリム君主にかわって、英国人こそがインドの眞の主権者としてふさわしいとするものであった<sup>37</sup>。

#### 4-4-4. 古代ギリシアと古代インドとの同質性

一般的に、グリーク・リバイバルは、古代ギリシア建築の実測調査<sup>38</sup>と、ヴィンケルマンによる「ギリシア美術模倣論<sup>39</sup>」（1755）の出版とが、二大源泉であるとされる<sup>40</sup>。

なかでもヴィンケルマンは、「高貴なる単純さと静謐なる偉大さ」としてギリシア藝術を定式化し、またホメロス文学を重要視した。この時期、ホメロス文学は、ギリシア人の純粹で自然な感情が文明によって腐敗し続けることになる以前の黄金時代の詩的天分の表現であると主張された<sup>41</sup>。

同時代、ヘースティングズがウェストミンスター校で学んだ古典文学と哲学<sup>42</sup>とは、彼の思想形成に大きな影響を与えていた<sup>43</sup>。

ヘースティングズは東印度会社の会長スミス（Nathaniel Smith, 1730-94）にあてた手紙<sup>44</sup>（1784）において、古代ギリシアと古代インドとの同質性を指摘している。すなわち

36) 荒松雄、前掲書、181-182頁

37) 東田雅博「支配の文化史」ミネルヴァ書房、1997年、130頁

38) J. Stuart & N. Revett, *The Antiquities of Athens*, London, vol. I-IV, 1762-1816

39) Johann Joachim Winckelmann, *Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke in der Malerei und Bildhauerkunst*, Dresden, 1755

40) 鈴木博之「建築の世紀末」昌文社、1990年、20頁

41) H・オナー「新古典主義」白井秀和訳、中央公論美術出版、1997年、73-75頁

42) 18世紀の英國教育は、古典教育を意味し、別の教科はほとんど教えられていなかった。少年たちは、古典の文学と言語から、高潔で寛大な感受性を習得し、悪よりも善を選ぶことを学ぶよう求められていた。英國の首相大ピット（William Pitt, 1708-78, 首相在任1766-68, のちのthe Elder 1st of Chatham, ホイッグ党員）は、当時の英國教育について、以下のように述べた。

「ホーマー（Homer, ホメロス）とバージル（Virgil, ウェルギリウス）は、ともに偉大な詩人であつただけなく、彼らは、思想などを吸収する若い世代の人々に、洗練された教訓を与える。それは、自尊心にたいする教訓、勇気、公平無私、眞実の愛、癡癡を制御する行動、人道主義にたいする教訓を示している。そして、ひとつの言葉の眞の重要性のなかに存在する、善についても示している（P. Moon, op. cit., p. 5）」。

43) P. Moon, op. cit., pp. 9-10

44) 1784年10月、ベナレスにおいて、ヘースティングズは、ウィルキンズによる「バガヴァット・ギーター」の英訳出版をまえに、東印度会社の会長スミスにあてて手紙を記した。この手紙のなかで「バガヴァット・ギーター」を解説した。

1784年12月、ロンドンにおいて、前述のウィルキンズの著書（Charles Wilkins, *The Bhāgavat-Geētā*, London, 1784）は、東印度会社重役会の権威下において出版された。前述の手紙は、この著書において、表題「Letter to Nathaniel Smith, Esquire」として掲載された。

P・J・マーシャルは、この手紙を、Charles Wilkins, *The Bhāgavat-Geētā*, London, 1784から引用し、自らの著書P. J. Marshall, *The British Discovery of Hinduism in the Eighteenth Century*, Cambridge, 1970に掲載した。

本研究は、このヘースティングズの手紙を、P. J. Marshall, op. cit., pp. 184-191にある表題「chapter 4 —Warren Hastings, "Letter to Nathaniel Smith", from The Bhāgavat-Geētā」から引用した。

ち、「バガヴァッド・ギーター<sup>45)</sup>」がホメロス文学に匹敵するものだと指摘している。

その比類のない観念の崇高さ、推論、口述ゆえに、最も偉大なる独創性の所産である。そこには、われわれの生活習慣のなかに求めることのむずかしい、分別にたいする崇高の足跡を見い出すことができる。この称賛ゆえに、私は、われわれの生活様式のなかで正しいとされている見解や行動、感情や態度、啓示された宗教的な信条、道徳的な責務のすべてを排除する。この尊重において、『イリアス』『オデュッセイア』と比肩できる<sup>46)</sup>。

またヴィンケルマンによれば、ギリシア芸術を模倣するには、「ホメロスを十分理解し得た人にして初めて之を歎美し得る<sup>47)</sup>」。そして、「古代の或プラトン注釈家の言った如く、ただ脳裡に描かれた像に拠って作られた、自然の一種理想的な美を認めるのである<sup>48)</sup>」とし、プラトンのイデア論にも通じる、通常の知覚を超越した一種の靈感を通して、ギリシア芸術に対する新しい感覚を説いた<sup>49)</sup>。

ヘースティングズは、以下のように記している。

バラモン教義は高く形而上学的である。それは、沈思熟考することで、自らの精神を肉感的な欲望から剥ぎ取り、自らの意識を対外的な対象物から消し去ることで、一種の靈感を授かるのである。靈感とは、通常の知覚を超越して高められた教義であり、純粹で理知的な精神へと通じる觀念である。この重要性は、御者クリシュナ（ヴィシヌの化身）が王子アルジュナへの教授を完結する、最後の文に最も顯著に示されている<sup>50)</sup>。

ここで彼が言及している、「通常の知覚を超越して授かる靈感」とは、ほとんどプラトンのイデア論の言い換えである。

すなわち、ヘースティングズは、古代ギリシア文学・哲学とインドのそれとと同じ価値観で評価していたのである。

45) *Bhagavad Gita*

インドの聖典。全18章700頃からなる。ヒンドゥーの二大叙事詩の一つである「マハーバーラタ」の第6巻第23-40章にあたる。本来、バガヴァッタ派の聖典だったものが、のちに「マハーバーラタ」に吸収された（G・ミッチャエル「ヒンドゥ教寺院」神谷武夫訳、鹿島出版会、1993年、3頁）。

「バガヴァット・ギーター」は、骨肉あい食むバラタ族による大戦争の開始の場面にあたる。アルジュナ王子は、この戦争がまさに始まろうとするとき、敵軍中に親族や長上が居並ぶのを見て戦意を失う。彼らを殺して血に汚れた勝利を得るよりは、むしろ自らの死を選ぼうとした。このとき、王子の御者クリシュナ（ヴィシヌ神の化身）は、王子が意氣沮喪したのを見て、武人の自尊心に訴え、自らの協議を説き、その躊躇のゆえなきを論じた。すなわち、事の成否や報酬の有無を顧みず、私心を払って結果を神にゆだね、有無に遭進することこそ解脱の道であり、人の世の相対や有限に煩わされるにおよばないと。クリシュナは、請に応じて未層有の神体を顯示して、王子を納得させ、王子の迷いを払った。「バガヴァット・ギーター」の特色とは、この行動の形而上学を、人格神の恩寵と信者の親愛に彩られた一神教に基づいたところにある。すなわち、ヒンドゥー叙事詩であるだけではなく、ヒンドゥー哲学の完璧な表現でもある（早島鏡正とその他3名「インド思想史」東京大学出版会、1995年、68-70頁）。

46) P. J. Marshall, op. cit., pp. 186-188

47) J. J. ヴィンケルマン「ギリシア美術模倣論」澤柳大五郎訳、座右宝刊行会、1976年、16頁

48) J. J. ヴィンケルマン、前掲書、22頁

49) H. オナー、前掲書、67頁

50) P. J. Marshall, op. cit., pp. 186-188

こうした見解は、古典教育を受けた英国人にとっては、例外的なものではなかった<sup>51)</sup>。さらに彼は、以下のようにも記している。

『バガヴァット・ギーター』で説かれたヒンドゥーの精神的な教義と哲学とが、自らの精神に密接に合致するものがある<sup>52)</sup>。

そして彼は、自邸ディレスフォード・ハウス<sup>53)</sup> (Daylesford House, Gloucestershire, 1788-97) 【図18】の内部において、自らが切望したヒンドゥー理念を具現化させた<sup>54)</sup>。

応接室には、多くの貿易商人が崇拜する女神ラクシュミーを表わしたマントルピースと、インドの宮廷シーンを表わしたマントルピースとがある。後者のマントルピースの中央パネル【図19】には、音楽家、舞踏家、ヨガの行者、フッカーで煙草を喫う皇太子の姿が彫刻されている。そして、その中央パネルの側面には、壺をもつ二人のギリシア化されたインド人淑女が彫刻されている<sup>55)</sup>。

つまり、ヘースティングズは、ギリシアとインドと同じ理想的な古代世界として評価したのである。

#### 4-4-5. 古代インドが古代ギリシアに先行しているとする考え方

ヘースティングズは、古代インドと古代ギリシアとは同質であり、さらに古代インドは古代ギリシアに先行していると考えていたようである。

インド建築については、第1章で述べたように、16世紀にインドの西海岸に入植したポルトガル人やリースホーテンによる『東洋案内記<sup>56)</sup>』(1596)によってサルセットとエレファンタの石窟遺跡が記述されて以来、ヨーロッパではこれらの石窟遺跡に関心がもた

51) たとえば、ジョーンズは、前述の協会3周年記念講演「ヒンドゥーについて」(1786)において、「古代インドのいわゆる六派哲学は、古代ギリシアのアカデマイアとかストア哲学のすべての形而上学を含んでいる。そこでピタゴラスとプラトンは、その崇高な理論をインドの賢者たちと同じ泉から引いていると信ぜずには、このヴェーダンタ哲学を読むことはできない (W. Jones, op. cit., pp. 412-413)」と述べた。

1794年、歴史家ロバートソン (William Robertson) は、『バガヴァット・ギーター』にはギリシア哲学者が贊美したのと同じような至高存在が語られていると論じた (William Robertson, *An Historical Disquisition concerning the Knowledge which the Ancients had of India*, vol. II, London, 1794, p. 322)。

1799年、科学者ブリーストリ (Joseph Priestly) は、瞑想によって魂を高揚させ、神との調和に達するという考え方には、キリスト教修道士の行為に似ているが、じつは修道士は、異教徒のプラトン主義者を真似ているだけだと論じた (Joseph Priestly, *A Comparison of the Institution of Moses with those of the Hindoos*, Northumberland, London, 1799, pp. 156-157)。

52) P. J. Marshall, op. cit., p. 187

53) ディレスフォード・ハウスは、建築家コッカレル (Samuel Pepys Cockerell, 1754-1827) によって設計された。外観は、コッカレルの提案によって、ムガール廟ドームとヨーロッパ古典主義とを折衷させたものあり、蜂蜜色に彩色された石灰石が使われた。室内は、ヘースティングズの提案によって豪華に飾られた。彼は、すべての家具をベンガルで制作させ、ムガールの小画像、インドの装甲、ウェッジウッドのタイルと花瓶、ウェールズ皇太子とヨーク公爵の胸像など、自らのコレクションで飾った (R. Head, op. cit., pp. 12-13)。

54) R. Head, op. cit., pp. 25-26

55) R. Head, op. cit., pp. 25-26

56) Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario*, Amsterdam, 1596

れていた。またバルビー (Gasparo Balbi) が、エレファンタの石窟をアレクサンドロス大王が建設した古代神殿だと考えた (1590) ように、ヨーロッパ人理論家によってギリシア神殿とインドの石窟遺跡との類似性が指摘されていた<sup>57)</sup>。

ところが1772年、前述のようにダウは「ヒンドゥーの慣習、礼儀、言語、宗教、哲学にかんする論文<sup>58)</sup>」（『ヒンドゥスタン地方の歴史』第2巻、1772）において、古代インドは最古の文化をもつと論じた<sup>59)</sup>。

1780年代、協会でもエレファンタ、エローラ、カンヘリーの石窟を描写され、これらが、言語や文学と同様、最古のものであるという論考も展開した<sup>60)</sup>。

ヘースティングズは、前述の東インド会社の会長スミスにあてた手紙において、「バガヴァッド・ギーター」を東印度会社の権威下に公衆に広く紹介することの目的を、以下のように記した。

私は、人類の創世というテーマのために、太古の時代から存在するインド文化にかんする実例を提示する<sup>61)</sup>。

彼はさらに続けて、「インド文化は、ローマ・カトリック教義によって著しく酷評されてきたが、その独創性ゆえにヨーロッパの基準では判断できない<sup>62)</sup>」と記したあと、古代インドについて、以下のように記した。

地球のわれわれ自身の地域における文明の最初の力作よりも先行している古代インド<sup>63)</sup>。

ここで言及された「地球のわれわれ自身の地域」とはヨーロッパであり、その「文明の最初の力作」とは古代ギリシア文明を指していることは自明である。インドはそれよりもさらに古いのであり、「人類の創世というテーマ」として提示できるほどであると、彼は指摘しているのである。

彼の見解は、ヘッド (Raymond Head) が指摘しているように、ギリシア・ローマ文化を研究する古美術研究家の権威に異議を唱えるものであった<sup>64)</sup>。

57) P. Conner, op. cit., pp. 113-114

58) Alexander Dow, "Dissertation concerning the Customs, Manners, Language, Religion and Philosophy of the Hindoos", *The History of Hindostan*, London, vol. II, 1772

59) A. Dow, op. cit., pp. 382-383

60) P. Conner, op. cit., p. 126

たとえば、西部インドの遺跡調査を行なった画家ホッジスは、「ヒンドゥー、ムーリッシュ、ゴシック建築の原型についての論文 (Dissertation on the Prototypes of Architecture, Hindoo, Moorish and Gothic)」(1787)において、インド建築を合理主義思想によって論じた。そもそも彼は、ギリシア建築の信奉者であったが、論文において、「オリエントは啓蒙のゆりかごであり、人類はアジアから生まれた (the Dissertation were exhibited in June 1977 by Hartnoll & Eyre Ltd.)」と記した。本研究は、この論文の内容を、P. Conner, op. cit., p. 126から引用した。

61) P. J. Marshall, op. cit., p. 184

62) P. J. Marshall, op. cit., p. 186

63) P. J. Marshall, op. cit., p. 186

64) R. Head, op. cit., p. 28

## 4-5. メルチャット・パークのヒンドゥー教寺院

### 4-5-1. 建設の経緯

ヘースティングズは、総督引退ののち英國議会で弾劾された。この弾劾裁判（1788-95）は、パーク（Edmund Burke, 1729-97）を中心とするホイッグ勢力による<sup>65)</sup>。

ヘースティングズは、英國人がインドの眞の主権者であるには、英國人がインド社会に政治的に介入することが必須であると確信し、大胆にも司法廷に英國人体系を導入した<sup>66)</sup>。これにたいして、パークは、英國人がインドの伝統的な宗教社会に不用意に介入することを否定し、在來の慣行を維持することこそ安定したインド統治をもたらすと考えた。そして、ベンガルの無秩序と混乱がその行政にあるとして、ヘースティングズを「インド諸制度の破壊者」「インドの法の侵犯者」として弾劾した。その象徴が「ヘースティングズのインド法」であった<sup>67)</sup>。

この弾劾裁判は、最終的にヘースティングズの勝訴に終わった。しかしヘースティングズは、多額の裁判費用のために全財産を失い、かつての総督として名誉も剥奪された<sup>68)</sup>。

メルチャット・パークの所有者オズボーン（Sir John Osborne）は、ヘースティングズの友人であり部下でもある<sup>69)</sup>。かねてよりこの裁判に不快だった彼は、ヘースティングズ行政とその総督としての名誉の回復を後世に伝えるために、自らの庭園内に記念建築物を建設した<sup>70)</sup>。

設計者は、画家T・ダニエルである。彼は甥ウィリアムとともにインドを旅行（1785-94）し、協会員（1788）となった人物である。帰国後、王立アカデミー会員（1799）、古物研究家協会の理事（1799）となった<sup>71)</sup>。

1800年、この記念建築物は、設計、竣工された。T・ダニエルは、この設計を無償で行った<sup>72)</sup>。

T・ダニエルは設計において、コナーとヘッドが指摘しているように、自らが描いた版画「古代ヒンドゥー教寺院、ロータス城内、バハール州<sup>73)</sup>」（1795-97）【図20】を典拠としつつ、最も簡素化されたヒンドゥー教寺院の建築形態を追求した<sup>74)</sup>。

65) P. Moon, op. cit., p. 310

66) P. Moon, op. cit., pp. 86-88, pp. 100-102

67) 宮原辰夫, 前掲書, 77-88頁

68) P. Moon, op. cit., p. 308

69) オズボーンは、かつて、東インド会社のベンガル陸軍大佐としてインドに就任していた。1771年に軍法会議にかけられたが、そのちアウド大守に就任した。1787年に英國に帰国した（Mildred Archer, *The Picturesque Journeys of Thomas and William Daniell 1786-94*, London, 1980, p. 230）。

70) P. Conner, op. cit., p. 117

R. Head, op. cit., pp. 13-14

71) M. Archer, op. cit., p. 38, p. 220

72) P. Conner, op. cit., p. 117

R. Head, op. cit., p. 13

73) Thomas Daniell & William Daniell, "An Ancient Hindoo Temple, in the Fort of Rotas, Bahar", *The Oriental Scenery*, vol. I, no. 2, London, 1795-97

74) P. Conner, op. cit., p. 117 R. Head, op. cit., pp. 13-14

1802年、彼はこの建築物の説明として、「ヨーロピアン・マガジン<sup>75)</sup>」誌に、自らが描いた版画「メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院<sup>76)</sup>」【図21】と記事を掲載した。

彼は、この建築物を、ヒンドゥー教寺院として設計したのである。

ただし、このヒンドゥー風の形態は、英國社会に受け入れられなかった。この寺院は異教思想によるものと考えられたり、庭園内の彫刻物は何度も盗まれた。また、近隣教区の国教会牧師さえも、この所行に荷担していた。そのため、この寺院は、ヘースティングズ死後（1818）の1850年頃に撤去された<sup>77)</sup>。

#### 4-5-2. ヘースティングズをヴィシュヌとして神聖化する

「メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院」の内部には、ヴィシュヌの化身した姿として「ヘースティングズの胸像」が収容され、この寺院の戸口に入る誰もが、この胸像と直面させられるよう計画された。胸像の台座と寺院の壁面には、碑文が刻まれた。庭園内には、ヴィシュヌがさまざまな様相に化身した姿として、「ヘースティングズの像」がいくつも設置された<sup>78)</sup>。

「ヨーロピアン・マガジン」誌は、以下のように記している。

寺院の面積は、ポーチを含めて、約22フィートであり、約15フィートである<sup>79)</sup>。寺院の高さは、ほぼ20フィートである。柱と付柱は、ヒンドゥー建築のこのオーダー特有の通常の装飾に加えて、おおくの神話上の彫像と寓意画で飾られている。とりわけ、ヴィシュヌによる重要な化身は、バラモンたちの教義によると、信仰と善行を司るために、また人類の再生をつかさどるために、ときおり、さまざまな物質的な姿をもって現われていた<sup>80)</sup>。

コナーとヘッドは、メルチエット・パークにおいて、ヘースティングズはヴィシュヌの化身として神聖化されたと論じている<sup>81)</sup>。

しかし彼らは、碑文が意味するところのものや、神聖化においてヴィシュヌ神話を適用した意図については、明らかにしていない。本研究は、これを分析する。

ヴィシュヌ神話はおもに『バガヴァット・プラーナ<sup>82)</sup>』に記されている<sup>83)</sup>。18世紀ヨーロッパでは、そのペルシア語訳文献が獲得されていた<sup>84)</sup>。ジョーンズは論文「ギリシ

75) *The European Magazine*, vol. XIII, December 1802, pp. 449-450

76) Thomas & William Daniell, "The Hindoo Temple at Melchet Park", *The European Magazine*, vol. XIII, December 1802, pp. 449-450

77) P. Conner, op. cit., pp. 117-118

78) P. Conner, op. cit., pp. 117-118

79) おそらく寺院は、奥行きが約22フィート、間口が約15フィートであったと考えられる。

80) *The European Magazine*, vol. XIII, December 1802, pp. 449-450

本研究は、この掲載記事の内容を、R. Head, op. cit., pp. 176-177から引用した。

81) P. Conner, op. cit., p. 119 R. Head, op. cit., p. 13

82) *Bhāgavat-Purāna*

『プラーナ』（全18部）のうちの第5部にあたる（早島鏡正とその他3名、前掲書、71頁）。

83) 早島鏡正とその他3名、前掲書、62頁

84) P. J. Marshall, op. cit., p. 205

ア・イタリア・インドの神々について<sup>85</sup>」（「アジア研究」第1巻, 1788）において、ヴィシュヌ神話にあるヒンドゥー創世觀と化身思想とを「バガヴァット・プラーナ」のペルシア語訳文献から引用した<sup>86</sup>。T・ダニエルは、カルカッタ滞在中（1786-1788）に協会を通じて、インドの宗教と建築にかんする知識を獲得していた<sup>87</sup>。とりわけ、彼にとってジョーンズとの接触は刺戟的で継続的なものであり、ジョーンズの上記の論文を掲載した「アジア研究」（第1巻, 1788）誌の挿絵について、二人はしばしば論議した<sup>88</sup>。協会の毎週の会合は、研究論文を聽講するために開かれ、協会員が執筆した論文を掲載した「アジア研究」誌は、総督と東インド会社の重役会を通して出版された<sup>89</sup>。ヘースティングズも、前述の東インド会社の会長スミスにあてた手紙において、ヴィシュヌの化身思想を解説している<sup>90</sup>。

「メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院」の壁面に刻まれた碑文は、以下のように記している。

インドの国民とその法を守るために、ときおり物質的な形態を身につける、インドの守護神として奉納した。とりわけ、不滅の《ヘースティングズ》のために。彼は、当時、大英帝国によるインドの行政管区の救済者のように思われていた<sup>91</sup>。

「バガヴァット・プラーナ」の第3章13項は、「ヴィシュヌは、世の悪を打ち負かし、正義を回復するために、地上に生まれかわる。社会的動乱のときであれ、精神的不毛がはびこるときであれ、神敵アスラが出現し正道が乱れるとき、ヴィシュヌは、人間・動物・半人半獣に姿をかえて地上に出現し、正義を回復し、再び天に返る<sup>92</sup>」【図22】と記している。

ヘースティングズは、ムスリム支配下の現実のインド社会が衰退していると実感した。現実のインド社会を改良するため、法を制定した。それは、古代インドに確立された法と慣習とを復活させるものであり、現実のインドを古代へと再構築するものである<sup>93</sup>。

85) Sir William Jones, "On the Gods of Greece, Italy, and India", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. I, no. IX, 1788, pp. 221-275

86) W. Jones, op. cit., p. 24

87) M. Archer, op. cit., p. 38

88) M. Archer op. cit., p. 38

89) "Rules of The Asiatick Society", *The Asiatick Researches*, The Asiatic Society, vol. VI, Appendix: I, 1799, pp. 589-595

90) P. J. Marshall, op. cit., p. 185

91) "Dedicated to the genii of India who from time to time assume material forms to protect its nations and its laws, particularly to the immortal HASTINGS, who in these our days has appeared the saviour of these regions of the British Empire."

本研究は、この碑文の内容を、P. Conner, op. cit., pp. 117-118とR. Head, op. cit., p. 13から引用した。

92) ヴィシュヌの化身思想は、「バガヴァット・プラーナ」の第3章13項、第7章2-10項、第8章7項、第8章15-23項、第8章24項、第9章10-12項、第9章15-16項、第11章1項、第11章4項、第12章2項に記されている。

本研究は、「バガヴァット・プラーナ」の日本語訳を、V・イオンズ「インド神話」酒井博六訳、青土社、1996年、117-119頁から引用した。

93) P. Moon, op. cit., p. 87

彼の行為は、東田雅博が『支配の文化史<sup>94)</sup>』（1997）において指摘しているように、インドの文化と制度の守護者としての自己表象であった<sup>95)</sup>。

すなわち、「メルチュット・パークのヒンドゥー教寺院」の壁面に刻まれた碑文は、元来、ヘースティングズはヴィシュヌであり、インド社会とその法を守るために、現世にさまざまな姿で現われ、インド社会の正道を回復した、ということを述べている。それは、ヘースティングズ行政（とりわけ法の制定）をヴィシュヌの所業として神聖化している。

「ヘースティングズの胸像」の台座に刻まれた碑文は、以下のように記している。

#### 神聖な蓮の花からの復活<sup>96)</sup>

「バガヴァット・プラーナ」の第3章8項は、「そのとき世界は水に覆われていた。唯一神ヴィシュヌは、瞑想の至福にひたって、四千ユガのあいだ水上で睡っていた。彼の内部にある微細な原理が、再び世界の創造を開始しようと欲し、彼の臍から出た。それは世界蓮となり、そのなかにヴィシュヌ自身も入り込んだ<sup>97)</sup>」【図23】と記している。

すなわち、「ヘースティングズの胸像」の台座に刻まれた碑文は、前述のヘースティングズ行政と総督としての名誉の回復とを、創造主であるヴィシュヌの所業として神聖化している。

つまり、メルチュット・パークにおける二つの碑文は、法の制定に象徴されたヘースティングズ行政と、彼のかつての総督としての名誉の回復とを、ヴィシュヌ神話を引用し、神聖化したのである。この神聖化には、「アーリア理論」にも似た発想が反映されていたと考えられる。

#### 4-5-3. 建築形態の特色

18世紀中頃、英國では多くのインド成金が自邸をインドの産物で飾ったが、それらは口ココの範疇にとどまっていた。しかし18世紀最後の四半世紀、英國において突然流行した「インディアン・リバイバル」は、ヨーロッパ大陸諸国では見られなかっただけではなく、シノワズリーの流行とは異なり、当初から学術的な態度でのぞまれた。その直接的な情報源は、インドに滞在した英国人画家による作品であった<sup>98)</sup>。

94) 東田雅博「支配の文化史」ミネルヴァ書房、1997年

95) 東田雅博は、ヘースティングズ時代のインド植民地政策について、以下のように記している。「オリエンタリストの時代、特徴的な植民地権力の自己表象とは、インドの文化と制度の守護者としての表象である。それは、インド社会の文化と制度の守護者というにとどまらず、その権力や権威の不可侵性あるいは絶対性を表象するものであった。また植民地権力は、その存在を正統化するために、インドの伝統的な権威を利用するが、同時に自らの権力が、在地の権力とは異なる外的権力であることを強調する必要もあった。すなわち、混沌と無政府の支配するインド社会に秩序をもたらしうる、第三の権力として自らを表象する必要があった（東田雅博、前掲書、130-131頁）」。

96) "rising out of the sacred flower of the lotus"

本研究は、この碑文の内容を、P. Conner, op. cit., pp. 117-118とR. Head, op. cit., p. 1から引用した。

97) 本研究は、「バガヴァット・プラーナ」の日本語訳を、V・イオンズ、前掲書、68-70頁から引用した。

98) R. Head, op. cit., pp. 26-28

たとえば、画家ホッジスによる版画集「インド景観図<sup>注99)</sup>」（1785-88）がある。彼は、公式記録画家としてキャプテン・クック<sup>注100)</sup>（Captain Cook, James Cook, 1728-79）の第2航海（1772-75）に随行したのち、インドを旅行した（1780-83）。帰国後、王立アカデミーの会員となった<sup>注101)</sup>。

また、ダニエルたちによる版画集「オリエントの風景<sup>注102)</sup>」（1795-1810）がある<sup>注103)</sup>。

T・ダニエルはカルカッタ滞在中（1786-88）に、協会を通じてインド建築の知識を獲得した。そして、インド北部を周遊中（1788-91）、バハール州ロータス城内（the fort of Rohtas, Bahar）で廃墟となったヒンドゥー教寺院を発見し（1790）、考古学的な関心をもつようになった<sup>注104)</sup>。

「オリエントの風景」は、「インド景観図」以上に、インド建築の様相を精確に詳細に伝えるものであった。それゆえ、建築への直接的な応用が可能であり、その影響も広範囲に及んだ<sup>注105)</sup>。とりわけ、その版画集「インドの古代遺跡<sup>注106)</sup>」（第5巻, 1799-1800）は、考古学研究の確実なる方向性を記すものである。「インドの古代遺跡」の制作と出版は、「メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院」の設計時期（1800）と重なる。彼がインドの古代遺跡に精力的に取り組もうとしたことは明らかである<sup>注107)</sup>。

彼は設計において、コナーが指摘しているように、版画「古代ヒンドゥー教寺院、ロータス城内、バハール州」【図20】にある、寺院の入口に位置する小さな柱式ポーチの建築形態を採用した<sup>注108)</sup>。

さらに彼は、【図20】にあるこの柱式ポーチを、その屋根とバラベットの形態を採用した。柱構造を壁構造にかえ、聖室とした。そして、【図20】にある柱式ポーチの底を、柱で支える陸屋根にかえ、あらたに、聖室に直結する柱式ポーチをつくった。こうして、【図20】の3部構成（柱式ポーチ、列柱ホール、聖室）の寺院を、2部構成（柱式ポーチ、聖室）の寺院に簡素化したのである。【図21】

99) William Hodges, *The Select Views in India*, London, 1785-88

100) 英国人海軍仕官。探検家。3回の大規模な探検航海によって「大西洋の地理的問題の解決者」とされている。彼の探検によって、現在とほぼ変わらない大西洋地図が示された。また各地の原住民の人類学・民俗学的調査、動植物の分布も明かになった。これらの探検には、画家が同伴した（「グランド現代百科事典」学習研究社, 1972）。

101) M. Archer, op. cit., pp. 9-10

102) Thomas & William Daniell, *The Oriental Scenery*, vol. I-VI, London, 1795-1810

vol. I : The Twenty-Four Views in Hindooostan

vol. II : The Twenty-Four Views in Hindooostan

vol. III: The Twenty-Four Views in Hindooostan

vol. IV: The Twenty-Four Views in Hindooostan

vol. V : The Antiquities of India

vol. VI: The Hindoo Excavations in the Mountain of Ellora near Aurungabad in the Deccan

103) M. Archer, op. cit., p. 38, p. 220

104) M. Archer, op. cit., p. 38, p. 220

105) M. Archer, op. cit., pp. 28-31

106) Thomas & William Daniell, "The Antiquities of India", *The Oriental Scenery*, vol. V, London, 1799-1800

107) M. Archer, op. cit., pp. 220-223

108) P. Conner, op. cit., p. 117

すなわち、T・ダニエルは、ヘースティングズをヴィシュヌをしてまつるヒンドゥー教寺院とするために、自らが「古代ヒンドゥー教寺院」と称した建築形態をさらに簡素化したのである。

1800年、寺院を献呈されたヘースティングズは、この建築形態を「高貴なる単純」と称して称賛した<sup>注109</sup>。この言葉は、同時代のヴァインケルマンが抱いた古代ギリシア観を彷彿させる。彼はヴァインケルマンの「高貴なる単純」という理念のもと、この最も簡素化されたヒンドゥー教寺院に古代ギリシアの精神を見い出したのである。

T・ダニエルとヘースティングズとの直接的な関係を示す資料はないが、少なくとも設計を通じて、庭園の所有者、設計者、被献呈者とのあいだで接觸があったものと考えられる。また設計者と被献呈者とは、ともに協会員でもあり<sup>注110</sup>、設計者は、この設計を無償で行なっている<sup>注111</sup>。こうした状況を考えると、設計者は被献呈者のインド理念を理解していたと考えることは自然である。

つまり、「メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院」にたいする設計者と被献呈者の態度は、新古典主義建築のひとつのあらわれであったように思える。

#### 4-5-4. ランドスケープ上の特色

T・ダニエルは、古代ギリシアの風景を理想的な風景とみなす、18世紀後半の風景画の潮流のなかにいた<sup>注112</sup>。

18世紀の英國式風景庭園は、古代ギリシアのランドスケープを再現するために、クロード (Claude Le Lorrain, 1600-82) の風景の連続のごとく見えるよう構想された<sup>注113</sup>。

また18世紀末、英國において新世界の光景が紹介された<sup>注114</sup>。新世界の慣習、建築、動植物、自然の様相などは、すべて「エキゾチック (exotic)<sup>注115</sup>」という概念で総括された。画家たちは、これらの特徴を、しばしば一つの作品のなかで混合した<sup>注116</sup>。

109) Bengal Past and Present, vol. XI, part II, no. 80, London, 1930, pp. 71-78

本研究は、このヘースティングズの言葉を、R. Head, op. cit., p. 13 から引用した。

110) P. Moon, op. cit., pp. 351-352 M. Archer, op. cit., p. 220

111) P. Conner, op. cit., p. 117 R. Head, op. cit., pp. 13-14

112) M. Archer, op. cit., pp. 10-11

113) H・オナー, 前掲書, 179-180頁

114) 18世紀後半、グランド・ツアーレ流行によって、英國にギリシア・ローマの風景が紹介された。また、3回にわたるキャブテン・クラックによる航海 (1768-71, 1772-75, 1776-80) によって、南海地方の風景が紹介された。これらの新世界の風景は、英國人理論家や画家たちに、ロマン主義的な風景を模索するための新しい美の対象を提供した (M. Archer, op. cit., pp. 9-10)。

115) exotic

ギリシア語にある「エキソティコス (外国からの)」という語に由来する。異国のモチーフ、特性、習慣などが次第に根づいていくのとはちがって、意識的かつ率先した応用に相当する。また、日頃慣れ親しんだものとの対比により際立った効果をもち、異様で幻想的な魅力をともなっている。どの時代にも、どの文化にも等しく見い出される、文化的な相互作用の過程を示すものである。18世紀以降のヨーロッパでは、探検と植民地政策がこれを促進した (S・コッペルカム「幻想のオリエント」池内紀とその他3名訳、鹿島出版会, 1987年, 29頁)。

116) M. Archer, op. cit., pp. 9-10

この時期、クロード流の風景画は、ギリシア的な高貴さへの郷愁を喚起させる、理想的な風景を描くために定式化されていた。たとえば、画家ホッジスがクロード流に固守して『イースター島の風景』（1774）【図24】を描いたとき、英国人はそれをホメロスが謳ったエーゲ海の情景と思い込んだのである<sup>注117</sup>。

T・ダニエルは、インドに出発する以前（1781）から、この新しい美意識の変化に気づいていたし、それを模索していた<sup>注118</sup>。

彼は、『オリエントの風景』をクロード流の古典的流儀で描いた<sup>注119</sup>。クロード流の風景画とは、たとえば『聖家族のエジプト逃避をめぐる風景』【図25】にあるように、画面の一方には樹々による暗い量塊がおかれ、これとの対比で、光にあふれた遠景がおかれることにある<sup>注120</sup>。

T・ダニエルによる『古代ヒンドゥー教寺院、ロータス城内、バハール州』【図20】や『メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院』【図21】にも同じ構成方式が認められる。また『オリエントの風景』は、インドの風景が崇高、ピクチュアレスク、エキゾチックの要素をもつことを提示した。そのテーマは、人間を畏怖させる荒々しい自然の様相ではなく、緻密で穏やかな光を表現した牧歌的な風景の詩情性にあった。その信条は、クロードの理想的な風景と一致していた<sup>注121</sup>。

T・ダニエルは、設計において、自らが描いた版画を典拠に、インドの風景を実際に具現化させた。そして、その庭園を、クロード流の版画『メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院』に写した<sup>注122</sup>。

つまり、画家T・ダニエルは、ランドスケープの理念において、古代ギリシアと古代インドとを同じ理想的な風景として提示したのである。メルチエット・パークは、ヴィシヌ神話を創出させた風景式庭園であり、クロードの理想的な風景画がもつ古代ギリシアの風景でもあった。

117) H・オナー、前掲書、186頁

118) アーチャーは、その根拠について、以下のように記している。

「T・ダニエルは、インド旅行に出発する以前の1781年、ル・デスペンサー卿 所有のWest Wycombe Parkの風景画を描いている。またサマーセット、ヨークシャー、オックスフォードの景色を描いた風景画を目にしている。これらの風景画は、カナレスボラーフ近郊にあるMother Shipton's Dropping WellやサマーセットにあるWookey Holeと同様に、洞穴や岩などの自然の様相を描写したものである。このことは、T・ダニエルが、当時の新しい美意識の変化に気づいていたことを示すものであり、また彼自身、それを模索していたことを示すものである（M. Archer, op. cit., pp. 10-11）」。

119) M. Archer, op. cit., p. 226

120) K・クラーク『風景画論』佐々木英也訳、岩崎美術社、1967年、102-103頁

121) M. Archer, op. cit., p. 226

122) P. Conner, op. cit., p. 117

#### 4-6. 小結

18世紀後半から19世紀初頭、言語学上の発見を契機に、「アーリア理論」が形成されるという思想的背景があった。

ヘースティングズは、ヘースティングズ侯爵と東インド会社の会長スミスにあてた手紙において、自らが抱く古代インドへの憧憬をあらわした。古代ギリシアと古代インドと同じ理想的な古代世界として評価した。また、古代インドは古代ギリシアよりも先行していると考えた。これにたいして、ムスリムを敵視する反セム主義的な考え方を抱きつつ、ムスリムに支配された中世インドは堕落であり、古代インドこそが理想化されるべきだと考えた。そして、「アーリア理論」にも似た発想をベンガル行政に適用させたと考えられる。

彼は、総督引退ののち英國議会で弾劾された。この弾劾裁判は、彼の全財産とかつての総督としての名誉を剥奪した。

メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院は、法の制定に象徴されたヘースティングズ行政と、彼のかつての総督としての名誉の回復とを、後世に伝えるために建設された。

寺院の設計者である画家T・ダニエルは、被献呈者であるヘースティングズのインド理念を理解していたものと考えられる。

メルチエット・パークにおいて、ヘースティングズは、ヴィシュヌ神話を引用した碑文によって神聖化された。この神聖化には、より一般的な「アーリア理論」が基礎となつた。T・ダニエルは、ヘースティングズをヴィシュヌとしてまつる寺院するために、自らが「古代ヒンドゥー教寺院」と称した建築形態をさらに簡素化した。そしてランドスケープの理念において、古代ギリシアと古代インドと同じ理想的な風景として提示した。

ヘースティングズ自身も、ヴィンケルマンの「高貴なる単純」という理念のもと、この最も簡素化されたヒンドゥー教寺院に、古代ギリシアの精神を見い出した。この寺院にたいする設計者と被献呈者の態度は、新古典主義建築のひとつのあらわれであったように思える。

つまり、ヘースティングズによる「アーリア理論」にも似た発想は、メルチエット・パークにおいて、碑文、建築、庭園としてあらわれた。設計者は、ギリシアとインドと同じ理想的な古代世界として評価する、被献呈者の理念を設計に反映させたものと考えられる。また、この理想的な古代世界を体現するという文脈において、「インディアン・リバイバル」は、「グリーク・リバイバル」とも類似していたと考えられる。